

石をのせた車

小川未明

青空文庫

あるところに、だれといつて頼るところのない、一人の少年がありました。

少年は、病氣にかかつて、いまは働くこともできなかつたのであります。

「これからさき、自分はどうしたらいいだろう。」と考えても、いい思案の浮かぶはずもなかつたのです。

いつそ死んでしまおうかしらんと考えながら、彼は、下を向いてとぼとぼと歩いてきました。いろいろな人たちが、その道の上をば歩いていましたけれど、少年の目には、その人たちに心をとめてみる余裕もなかつたのであります。

やはり、下を向いて歩いていきますと、前を歩いているものが、なにか道に落としました。少年は、はつと思つて顔を上げますと、先にゆくのはおばあさんでありました。おばあさんは、自分がなにか落とされたのも気づかずに、つえをついてゆきかかりましたから、少年は、うしろから、おばあさんを呼び止めました、

「おばあさん、なにか落ちましたよ。」と、彼がいますと、おばあさんは、はじめて気がついて、振り返りました。そして、道の上に、自分の落とされたものを見て、びっくりして、

「まあ、ありがとうございます。よく知らしてくださいました。これは、私の大事なものです。」と、拾い上げて、それから曲がった腰を伸ばして、少年の方を見て礼をいいました。

「おまえさんは、いくつにおなりです。」と、この人のよいおばあさんは、話が好きとみて、少年に問いました。

「十五になります。」と、少年は答えました。

おばあさんは、しげしげと少年の顔を見ていましたが、

「おまえさんは、どこか悪いところはありますか。」とたずねました。

「どうも弱くて困ります。体さえ強ければ働くのですが……。」と、彼はうなだれて答えました。

「それなら、湯治にゆきなさるといい。ここから十三里ばかり西の山奥に、それはいい湯があります。谷は湯の河原になっています。二週間もいつてきなされば、おまえさんのその体は、生まれ変わったようにじょうぶになることは請け合いです。」

「それはほんとうですか？」と、少年は、生まれ変わったようにじょうぶになると聞いて、驚きと喜びとに飛び立つように思いました。

「ああ、それはほんとうだ。」と、おばあさんは答えました。そして、さつきとあちらへ
 行ってしまいました。

少年は、おばあさんから、いいことを聞いたと思いました。

「しかし、その湯のあるところは、なんというところだろう。」と、しばらくたつてから、
 少年は思い返しました。けれど、「なんでも、十三里ばかり西の山奥だということ
 だから、西へ行って、聞いたらばわからないこともあるまい。」と思いました。

たとえば、そのように、いい温泉があつたにしても、すこしの金をも持たない少年
 には、その温泉へ行って治療をすることは、容易なことではなかつたのであります。
 ただ、彼は自殺してしまうということだけは思い止まりました。

「そんないい温泉があつて、この体が達者になれるものなら、いま死んでしまつては、
 なんの役にもたたない。どうかして、その温泉へ行って体を強くしてこなければならな
 い。」と、少年は思いました。

なにをするにしても、病身であつて、思うように力が出ず、疲れていましたから、
 ほんとうに、どうしたら旅費がつくれるだろうと考えながら、少年は路を歩いていま
 した。

少年の頭には、このばあい浮かんだものは、乞食をするということよりほかに、い考えがなかつたのであります。

「そうだ、乞食をしよう。」と、少年は思いました。

まだ、乞食というものを経験したことのない彼は、どこへ行って、どうして知らぬ人々から銭をもらったらいだらうかと思いました。

ほとんど途方に暮れてしまつて、少年は、ある道の四つ筋に分かれたところに立っていました。そこは、町を出つくしてしまつて、広々とした圃の中になっていました。そして、どの道を歩いていっても、その方には、黒い森があり、青々とした圃があり、遠い地平線には、白い雲がただよつて見えるのであります。

「この四つ筋の道は、それぞれ町や村へゆくのであろうが、どんなところへゆくのだろう。」と、少年はあてもなく、左右前後を見渡していたのであります。

そのとき、一人のおじいさんが、あちらからきかきました。少年はぼんやりと見ていると、おじいさんは石につまずいて、げたの鼻緒を切つてしまいました。

「ああ困つたことをした。」と、おじいさんはいつて、跣足になつて、鼻緒をたてようと思いましたが、なにぶんにも目が悪いので、思うように鼻緒がたちませんでした。

少年しょうねんは、これを見みますと、さつそくおじいさんのそばへやってきて、

「おじいさん、私わたしがたててあげましょう。」と、しんせつにいいました。

「これは、これは、おまえさんがたててくださいますか、ありがとうございます。」と、

おじいさんは、たいそう喜よろこびました。

少年しょうねんは、おじいさんのげたの鼻緒はなおをたてていますと、あごひげの白しろいおじいさんは、

つえによりかかつてあたりを見みまわしていました、

「あすは、お寺てらのお開帳かいちようで、どんなにかこの辺へんは人通ひととおりの多いことだろう。お天気てんき

であつてくれればいいが。」といいました。

「おじいさん、明日あしたは、この道みちをそんなに人ひとが通とおりますか。」と、少年しょうねんはききました。

「ああ、朝あさのうちから通とおるにちがいない。しかし、この四よつ街道かいどうでよくみんなが道みちをま

ちがえるのだ。知らぬ人ひとは困こまるだろう。」と、おじいさんはいいました。

「おじいさん、この四よつ街道かいどうの行ゆく先さきは、どこと、どこだか、私わたしによく教おしえてください

。」と、少年しょうねんは頼たのみました。

おじいさんは、一つの道みちは、お寺てらのある町まちへゆくこと、一つの道みちは、遠とほいさびしい村むらへ

ゆくこと、一つの道みちは海うみの方ほうへゆくこと、一つの道みちは山やまの方ほうへゆくことを、細こまかに、少年しょう

年ねんに向むかつてきかせたのでありました。

少年しょうねんが、おじいさんのげたの鼻緒はなおをたててしましますと、おじいさんは喜んで、町まちの方ほうへといつてしまいました。

少年しょうねんは、いいことを聞いたと思おもいました。自分じぶんは、明日あすこの四よつ街道かいどうのところにすわつていよう。そして、道みちを迷まよつた人ひとには、よく教えてやろう。自分じぶんは、どうしてもほかの乞食こじきがするように、通とおる人ひとごとに頭あたまを下さげてあわれみを乞こうことはできないが、ただ黙だまつてすわつていたら、なかには銭ぜにをくれてゆくものもないともかぎらないと、考かんがえました。

あくる日ひ、少年しょうねんは朝あさはや早くから、そこにすわつていました。いい天気てんきでありましたから、おじいさんのいったように、お寺てらのお開帳かいちように出でかける人ひとが続つづきました。よく道みちを知しっている人ひとたちは、さつさと少年しょうねんのすわつている前まえを通とおり過ぎて、道みちをまちがわずにその方ほうへとゆきました。中なかには、老人ろうじんもありました。若い女わかおんなもありました。また親おやたちに連つれられてゆく子供こどもなどもありました。たまたまやさしそうな女おんなの人が、少年しょうねんのすわつている姿すがたを見ると、前まえに立たち止どまって、懐ふところから財布さいふをとり出して、銭ぜにを前まえに置おいていつてくれました。そんなときは、少年しょうねんは気恥きはずかしい思おもいがして、穴あなの中なかへでも入はい

りたいような気がしましたが、早く温泉場へ行って、病気をなおしてから働くということを考えて、恥ずかしいのも忘れて、どんなつらいことも忍耐をする勇気が起こったのです。

こうしておおぜいが連れ合つていった後から、一人できかかる男や、女がありました。その人々には、よく道がわからないとみえて、四つ街道にきてから、うろうろとしていました。

「お寺へおいでなさるのですか。」と、少年はいいました。

「ああそうだ。」と、その人は答えました。

「そんなら、そちらの道をおいでなさい。」と、少年は教えました。

中には、喜んで礼をいってゆくものもあれば、また銭を少年に与えてゆくものもありましたが、また中には、振り向きもせず、礼をいわずにいってしまうものもありました。また、まれに、おおぜいでやってきて、みんなが道を知らないばあいなどもありました。そんなとき、少年がやはり道を教えてやると、

「感心な子供だ。かわいそうな子供だ。これにはなにか子細があつて、乞食をするのだらう。」などとうわさしあつて、みんなが銭をくれてゆくこともありました。

少年は、その日は思いも寄らぬたくさんな金を、人々からもらいました。そして、日暮れに木賃宿へ帰ってきて泊まりました。彼は、ほかにいって泊まるどころがなかったからです。

この木賃宿には、べつに大人の乞食らがたくさん泊まっています。そして、彼らは、その日いくらもらってきたかななどと、たがいに話し合っていました。

「俺は、一日じゆう人の顔さえ見れば、哀れっぽい声を出せるだけ絞り出して、頭を下げられるだけ低く下げて頼んでみたが、これんばかりしかもらわなかった。」と、あばた面の乞食が銭を算えながらいっていました。すると一人の脊の高い、青い顔をした乞食が、「俺は、一日じゆうびつこのまねをして町じゆうを歩きまわったが、やっと、こればかりしかもらわなかった。」と、やはり銭を掌にのせて、見つめながら話していました。

少年は、黙ってそばに小さくなって、みんなの話をきいていましたが、脊の高いのが、「やい、小僧、おまえは、いくら今日もらってきたか。」と、大きな声でふいに尋ねました。

少年は、正直に、その日もらってきた金の高を話しますと、みんなは、びつ

りして目をみはりました。

「小僧、だれに話をつけて、俺の縄張り内を荒らしやあがったか。その金を、みんなこへ出してしまえ。」と、脊の高いのは少年をにらみつけていいました。

少年は、もうすこし金がかたまったら、それを旅費にして、西の方の温泉場をさして、出かけるつもりでいましたやさきでありましたから、死んでもこの金は出されないとおもっていました。けれど、あまり相手のけんまくが怖ろしいので、どうなることかと震えていました。

「まあ、堪忍してやんなさい。なんといつても、まだ子供だ。それに病身とみえて、あんなに顔色が悪いのだから。」と、あばた面の男は、仲へ入って、その場を円くおさめてくれました。

少年は、心の中で、顔つきにも似ず心のやさしい乞食だと思つて、あばた面の男に感謝していました。

夜中のことであります。あばた面が少年を揺すり起こしました。そして、小さい声で、

「おまえは、昨日どこでもらつてきた。」とききました。少年は四つ街道のところ

にすわつていたこと、そして、開帳へゆく人々に道を教えたことまで、すっかり話をしました。

「なるほどな。」といつて、あばた面の乞食はうなずきました。

夜が明けると少年は、今日も四つ街道のところへすわつて、みんなに道を教えようかとおもいました。太陽が上がると、彼は、昨日のところにやってきました。すると、いつのまにか自分より早く、あばた面がそこにきてすわつていたのでした。

「昨夜、俺がおまえを助けてやったんだ。今日は、ほかをまわるか、休んで宿にいろ。そのかわり、俺がたくさんもらつたら、分けまえをくれてやるから。」と、あばた面は、目をぎよろりと光らしていました。少年は抵抗することもできなく、またほかを歩いて、どうしようという考えも起こらず、そのまましおしおと宿にもどつてきました。

その日の暮れ方になると、外へ出歩いていた乞食らがみんなもどつてきました。あばた面は、たいそう不機嫌な顔つきをして帰つてくると、少年に向かつていいました。

「おまえのいうことを聞いて、ほんとうにしたばかりに大ばかをみてしまった。だれひとり、道を聞くものもなけりや、銭をくれるものも数えるほどしかなかつた。分けまえどころか、おまえから昨日の分けまえをもらわなけりや、埋め合わせがつかない。それがいや

なら、この宿からさつさと外へ出てゆけ。」と、怖ろしい目つきをしてにらみました。

少年は、ついにその宿から追い出されてしまいました。暗い夜路をあてもなく歩いてゆきますと、いつしか山の方へ入ってゆく道に出たものとみえて、ある大きな坂にさしかかりました。

ちようどこのとき、馬に車を引かせ、石を積んで坂を上りかけている男を見ました。どこからきたものか、人も馬も疲れていました。少年は気の毒に思つて、坂を上るときに、その車の後を押してやりました。すると車の上から、小さな石ころが一つ転げ落ちました。なんの気なしに振り向いてみると、その石が不思議にきらきらと光っていました。

「石が落ちた。」と、少年は、男に注意をしたけれど、男は黙っていました。返事をするのも物憂かつたようすであります。また、石ころ一つくらいどうでもいいと思つているようにも見えました。少年は、坂の上まで押してやりました。しかし、男は下り坂にかかると礼もいわずに、さつさといつてしまいました。

独り後に残された少年は、ぼんやりと立っていました。なんとなく、光る石に気が引かされましたので、わざわざもどつてそれを拾ってみました。それは、黒つぽい岩のような石のかけらでありました。少年は、その夜は、ついにこの石を抱いたまま、坂

の下の草原の中で野宿をしました。

夏の夜明け方のさわやかな風が、ほおの上を吹いて、少年は目をさましますと、うす青い空に、西の山々がくつきりと黒く浮かんで見えていました。そして、その一つの嶺の頂に、きらきらと星が光っていました。少年は、じつと星の光を見ていますうちに、熱い涙がしぜんと目の底にわいてきました。それは、産まれ変わったように体が強くなつて、ふたたびこの世の中に出て働くことのできる、長い、長い、未来の生活が空想されたからであります。

うにいえない悲壮な感じが、このとき、少年の胸にわき上がりました。

「どんな、遠くへでも歩いていこう。」

少年は、おぼあさんから聞いた温泉を思い出して心でいいました。

いよいよ夜が明けると太陽が笑いました。このとき、少年は、いままで大事にして握っていた石ころをつくづくとながめたのです。昨夜草原にねていて、空に輝いている星をながめたが、その星のかけらのように、美しく、紫色に光っている石であります。

少年は、その石を持って町へ出ました。そして、ある飾り屋の前を通りかかりまし

たときに、その店さきにすわっていた主人にこの石を見てもらいました。主人は、眼鏡をかけて、よく石を見ていましたが、

「これは珍しい石だ。」といつて、どうか売ってくれないかと頼みました。少年は、石よりもつと自分の命がたいせつだと、温泉行きのことを思つて、主人に美しい紫色の石を売つてやりました。

「こんな珍しい石なら、いつでも買いますから、また、ありましたら持つてきてください。」と、飾り屋の主人はいいました。

少年は、その店から出て、往來に立ちましたときに、また、今夜も、あの坂の下に待つていて、もし、あの車がきたときに、後を押してやろうかなどと考えましたが、なんでも、いい機会というものは、二度あるものでない。お開帳の日だつて、つぎの日には、あんなことがあつたと考えると、旅費のできたのを幸いに、はやく目的地をさしてゆこうと決心したのであります。」

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「婦人之友」

1921（大正10）年9月

※表題は底本では、「石《いし》をのせた車《くるま》」となっています。

※初出時の表題は「石を載せた車」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

石をのせた車

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>